

同行二人

和泉 攷

歩き始めてちょうど十日目の夕暮れ、桂木裕一は途中で出会ったベテランお遍路に教えてもらった噂の善根宿に到着した。宿とは言うもののそれは払い下げられた廃バスを改装したもので、車体の後方には善人宿と墨書した板が掛かっている。何が噂になっているのかと言うと、善根宿ゆえ宿泊料がいらぬのは言うまでもないことだが、ちゃんとした食事まで無料で奉仕してくれるというのだ。

裕一は無理せずそここの宿泊施設で快適に寝泊りしながら四国をまわろうとしていたのだが、一回ぐらいは他人と相部屋になって一夜を過ごすのも面白いかもしれないと思った。バスのドアを開けて中を窺うと、奥の方に先客が一人いた。六十過ぎぐらいだろうか、八分がた白髪の、いかにも憔悴しきった感じの男だった。お互いに軽く声を掛け合い、裕一は中ほどに入って旅装を解きにかかった。するとそこにもう一人、表で自転車をとめて入って来た者がいた。裕一が会釈しようとした時、彼はいきなり荷物を空いた席にぶん投げた。ひよっとしたら手荒く置いただけなのかもしれないが、裕一にはそのように見えた。サイクリング用のヘルメットを脱ぐと、これもぞんざいに隅の方に放り投げた。何かよほど腹の立つことでもあったのかと彼の顔をちらつと見ると、裕一の息子ぐらゐの歳のスポーツ刈りの青年が立っていた。

裕一と奥の初老の男が同時に「こんにちは」と声を掛けた。若者はバツが悪かったのか、自分の荷物の方を気にしながら、アアとかエエとか言葉にならない声を発した。

今夜の客はこの三人だけらしい。噂に違わず夕食はデザートまで付いた豪勢なものだった。お接待には違いあるまいが、ここまでしてくれる御主人の真意はいったどこにあるのかなどと下衆な考えを巡らすだけで、こちらの浅はかで未熟な人間性までがあぶり出されそうである。妻のおそらく最後となる頼みとは言え、半分興味本位でやって来た四国八十八ヶ所の歩き遍路であったが、見るもの聞くもの、都会の日常、世間の常識では測りきれない、人智

を超えた異世界に迷い込んでしまった感がある。

初老の男はさつきからずっと日記のようなものを小さなノートに書いている。若者はケータイに何か長い文章を打ち込んでいるようだ。桂木裕一はアイポッドに娘が入れてくれた落語を聴きながら懸命に笑いを堪えていた。

書き物を終えた男は、金剛杖を突いて海の方に向かって出て行った。裕一は後を追いかけたい衝動を覚えたが、脚のことを考えると、そんな酔狂なことにエネルギーを使うべきではないと思いつまった。それから五分もしないうちに、若者はケータイを無造作にリュックの脇に滑らせると、膝を立てたまま横になった。すぐに寝息が聞こえたかと思うと、ほどなく急に身体を起こした。裕一は反射的にビクツとした。彼はペットボトルの水を三口ほどゴク音をさせて飲んでから、急に裕一の方に向き直り、声を掛けてきた。

「あんたのヘッドフォンから変な音が洩れてくるんだけど、どうにかならない？」

「ごめんごめん」

裕一はポリウムを下げながら謝った。

「何聴いてんの」

「何って……」

裕一は口ごもりながら、この若者のタメ口をたしなめるべきかどうか迷っていた。

「別に何だっていいじゃない」

「人がさあ、せっかく尋ねてんだから、そういう時って素直に答えるもんじゃないの」

なぜか相手の方も苛立っているようだ。裕一は厄介な奴と相部屋になったもんだと、一回分の食費と宿賃をケチった自分を今さらながらに悔やんだ。しかしもともと争いごとは嫌いなタチだし、お互い険悪な気持ちで一夜を過ごすのも精神衛生上よくないと思い直し、若者の側に譲歩することに決めて答えてやった。

「落語って解るかな」

「ラクゴ？ ああ、笑点ね」

「うーん、まアそんなものかな」

「知ってるよ。小学校でジュゲムっての無理やり覚えさせられたから。ジュゲムジュゲムゴウノスリキレ……」と頼んでもいないのに最後の一句まできっちり暗唱してみせるものだから、わざとらしく大きな拍手でもしてやろうかと思ったが、大人げないので止した。

「それ、ジュゲム入ってるの？」

「いいや」とだけ言ってアイポッドのスイッチを切り、リュックにしまうと、裕一は急に外の空気が吸いたくなって表に出た。どうもああいう手合いは疲れる。

遠くには灯りが見えるが、バスの周囲は真つ暗だった。寝る前にトイレに行っておこうと、すぐ近くの道の駅に向かった。置いてきた荷物は少し気になるが、貴重品はすべてポシェットに入れてここにある。

用を済ませて広場のベンチに腰を掛けると、タバコに火をつけた。ゆうべはどうしてあんなに弱気だったんだろうと、裕一は思い返していた。そうだ、地図を見ていて二十三番札所薬王寺から次の最御崎寺までの道のりに目がくらんで、瞬時に気持ちが悪えたのだった。地図上ではこの十日間に歩いた距離ほどを行かなければ二十四番札所には辿り着けない。多くのお遍路がこの区間だけは乗り物に頼りたがるのも解る。何と言っても今回は生まれて初めてのことだし、何も無理をして通し打ちすることもあるまい、徳島だけの一国参りでも充分に願掛けはできたはず、ここで帰ったからと言って妻も子供たちも怒りはしまい、とゆうべは一応の結論を出していたのだ。それでかえって肩の力が抜けてくれたのかもしれない。また考えが変わった。いつの日かその気になって続きを打とうとした時、おそらく修行の道場、高知のスタート最御崎寺へはバスで行くことになり、結局はこの長い区間は未踏のまま残ってしまう。こういうことには妙に几帳面な裕一には我慢のならないことだった。

桂木裕一が長年勤めていた商社を突然リストラされたのは、去年の秋のことだった。じわじわと窓際に追いやられていたので予感はなくもなかった。しかし、定年まぎわの、しかも会社草創期から頑張ってきた人間を辞めさせてどうするとタカをくくっていたことも確かだ。長期にわたる世界的な不況は、しかしそんな個人の事情に頓着なく、大鈍のひと振りでも数百人の首を斬り飛ばした。

不幸というものは重なるものらしく、それと前後して妻の沙恵子の膵臓に癌が見つかった。その部位の悪性腫瘍は最もタチが悪いもののように、妻の強い要望で告知されたものの、半年ないし一年という医師の診断に、気丈な彼女もショックを隠せなかった。

そもそも裕一の人生の予定表の中に、四国八十八ヶ所巡りなどという項目はなかった。沙恵子がまだ週に一回のフィットネスクラブと生花、それに月に二回の地域ボランティアに向いていた頃、唐突に言ったのだった。

「あなたがぶじ定年退職したら、記念に今まで出来なかった大きな旅行してみない？」
それからというもの、休みの日ごとに、彼女は美しい写真で溢れた旅行パンフレットを何種類もテーブルに広げては、憑かれた者のごとく夢を語って聞かせるのだった。世界一周の

クルージング、ネパールやアフリカでの長期滞在、日本中の温泉巡り。二人によほどの意識革命でも起こらぬ限りまず実現しそうにない大胆なプランを、沙恵子は次から次へと持ち出してきた。裕一は半ば呆れながらも、妻がこんなにも生き生きと目を輝かせたのは何年ぶりのことだろうと優しく見守った。未来永劫続くかと思われた夢物語は、ある日妻の「どれも気がなさそうね」と言った後の意外な一言でピリオドが打たれた。

「じゃあ四国のお遍路ということで決まりね」

裕一はたまげた。

「何でまたよりによってお遍路なんだ」

「実はわたし子供の頃から、老後は夫婦で巡礼の旅に出るのが夢だったんだ」

妻に涼しげな顔でそう言われると、断ることが即夫婦の関係解消を意味していそうで、黙って頷くしかなかった。

ただ問題が一つあった。体力的なことさながら、どちらかと言うと精神的な領域、そう、無神論者で非科学的なものに対しては懐疑どころか敵意すら覚える裕一に、信仰心の踏絵のような巡礼など耐えられるわけがない。当然彼はそのことを口に出して最後の抵抗を試みた。すると沙恵子は四国八十八ヶ所のパンフレットをクリアファイルからおもむろに取り出すと、待ってましたとばかりに言ったのだ。

「そう来ると思ってた。でもね、お遍路には宗派は関係ないの。悩める人も罪深き人も、たとえ無宗教の人さえも温かく受け入れる懐の深さを持っている、ってここに書いてあるわ。どう、お墓もお仏壇もいらなくて言い張るあなただって受け入れてもらえるのよ」

「向こうが受け入れてやるつたって、僕の方から願い下げだね」

いったん強気に出ると、確かに自分が賽銭を上げたりお経や御詠歌を唱えている姿など想像したくもなかった。やれ、このまま平行線で四国に踏み込まずに済みそうだと安心した矢先、妻の入院と己の解雇という思いも寄らなかった災厄が同時に裕一を見舞ったのだった。抗癌治療もはや手遅れで、日毎に衰弱していく沙恵子は力の入らぬ手で夫の手を握り、遺言のように一言一言はつきりと言った。

「どうしてもあなたと二人で四国を回リたかった。でもわたしはもうダメだから、私の分も一緒に回って来てほしいの。理由がないと行けないあなただから、わたしが一日でも長生きできるように、いいえ、苦しまずにあの世に旅立てるようにと、そう祈りながら行ってきてちょうだい。あなたが戻って来るまでわたし待っているから」

沙恵子が好きな上方落語を何十席もアイポッドに入れて持たせてくれたのは長女だ。ほと

んど共通の趣味が無かったのだから、せめてこの機会にお母さんが好きだったものの一つだけでも理解してあげなさいよ、というのが彼女の言い分だった。病院では妻も同じようなものを聴いていることだろう。

もつとも最初のうちは歩きながら自分の来し方行く末について思い巡らしてみようなどと殊勝なことも考えていたのだが、実際に歩いてみるとそんな余裕はなく、それなら落語でもトイヤホンで聴き始めたものの、すれ違う車の音でひっきりなしに中断されるし耳元も暑苦しいので、宿に着いて眠くなるまでの子守歌がわりに聴くことにしていた。ふだん沙恵子が慣用句のようにして言っていたフレーズが所々に出てきて、懐かしくもあり、いとおしくもあって、胸が熱くなるのであった。例えば「おっしやれや、おっしやれや、おっしやらなあきまへんで」とか「筆の先でドガチャガドガチャガ」とか「ああら、蚊帳吊りたい蚊帳吊りたい」とか。言い方が面白いので、もう一度言ってくれとリクエストするのだが、いつも、こういうのは簡単な手品と同じで二回目は面白くなくなるものなの、と逃げられてしまう。今となってみれば、落語会に一緒に行こうと誘われた時に行ってやれば良かったと、裕一は後悔した。

八時を回った。もし何か特別なことがあれば、子供たちの誰かから連絡が入ることになっている。連絡のないのはお互いに無事のしるし。妻のことを想うと、やはりここでギブアップするわけにはいかない。

タバコを携帯灰皿で揉み消して立ち上がった時、先ほど海岸の方に出て行った初老の男が、まっすぐに裕一の座っているベンチの所までやって来た。

「いいですか」と裕一の隣を指差した。

「どうぞ」

バスの中ではひどく気難しい人物に思っていたから、裕一は内心ほっとした。

「この海岸は海亀で有名なんですよね」

裕一は努めて馴れ馴れしい感じで言った。相手は声に出さずにただ頷いた。金剛杖を両手で握ったまま弾む息を整えているように見えた。

「浜辺というやつは」と切り出したが、なかなかその下を続けようとしなない。妙な息苦しさに耐え切れず、裕一は「浜辺はどうでした」と水を向けてみた。しばらくして彼は、「以前は夜の浜辺に独り座って、波の音を何時間も聴いていると、とても癒されたものです」と言った。意外とロマンチストなんだと裕一は思う。

「でも今夜は違った。私はとても不安になりました。波打ち際の危うさに気付いてしまった

のかもしれない」

「波打ち際の危うさ、ですか」

詩的なようでもあり哲学的なようでもある新鮮な言葉の響きに、裕一は興味を抱いた。

「ええ。海と陸の境界にあつて、そのどちらでもない中途半端な領域。はつきりしないというのは、人を不安にさせます」

「でもその浜辺があるから、海亀は産卵できます」

「そう、浜辺の鳥も貝を捕れる。でも海の大漁も陸の豊作も望めない。だから現代人はそんな場所をむりやり固めて埋め立ててしまうのかもしれないね」

この老人は詩人なのか哲学者なのか。どの道お遍路にやって来るような人種なのだ、変わり種であることに違いはなからう。

「すみません。明日から海が拝めなくなるのかと思つたら、無性に最後の海が見たくなりましてね。自分でもこんなに感傷的になつてしまふとは思ひもませんでした」

「ひよつとして逆打ちされているのですか」

「ええ」

男は初めて少しだけ頬をゆるめた。反対に裕一の方は気を引き締めた。と言うのも、出発前に読んだガイドブックの中に、逆打ちはより悩みや罪穢れの深い人が行なうことが多く、むやみにあれこれ詮索することは避けたい、という一文があつたのを思い出したからである。それで裕一は当たり障りのない話題を口にした。

「あす一日で高知県に入るのは、ちよつと無理ですかね」

「私は今日一日で来れましたよ、県境からここまで」と言つたあと、自慢っぽく聞こえたかもしれないと思つたのか、「いやあ、この歳には限界を超えていました。ムチャはするものじゃないです」と照れたように付け足した。

「失礼ですが、おいくつですか？」

「このあいだ五十五になりました」

裕一は聞き違えたのかと思つた。どう見ても還暦は過ぎていよう。驚きを隠すために裕一は自己紹介を始めた。

「この歳だなんて、私より二つも若いじゃありませんか。あ、私、桂木と申しまして、京都から」

「京都ですか」

「京都と言っても市内じゃありません。滋賀の近くです。私、半年ほど前にリストラに遭ひましてね」

男は裕一の顔を覗き込むように見た。

「おまけに女房が癌を宣告されて、現在入院中です」

相手の身の上話を封じるかのように、裕一は自分の身に起こったことを一方的に話した。

「大変ですね、お宅も。私、名乗りましたっけ」

「いいえ」と首を振ると、「私、飯塚と言います、よろしく」と張りのある声で言った。飯塚氏は結局自分のことは何も語らなかった。言葉は無かったけれど、ベンチに並んだ二人は贅沢な時間を共有できた。少なくとも裕一はそう感じていた。

「そろそろ戻ります」

そう言って裕一が立ち上がると、飯塚氏も「では私も」と言いながら立って、公衆トイレに向かった。

桂木裕一が先に一人でバスの所まで戻って来ると、若者は外に出て太極拳の真似事をしていた。黒っぽいTシャツを着ているので、手の先の動きしかよく見えない。またこいつと言葉を交わすと不愉快になりそうだと感じたので、裕一は飯塚氏が戻って来るのを暗がりの中で待っていた。その飯塚氏が現われる前に若者は裕一に気がついて、声を掛けてきた。

「大阪弁って若手の漫才なんかで聞くことあるけど、落語のは古い形なんすね」

信じられない言葉に、裕一は怒りよりも強く恐怖を覚えた。背筋がぞくぞくとするのはこういうことかと思う。

「落語ってどんなのになって興味湧いてきたんで、これ借りてます」

貸した覚えなんてないぞ、と喉元まで出かかった言葉が音を伴わないで空しく拡散して行く。その時、杖を突く音が背後から近づいてきた。裕一は半ばホッとしながらも、何かとんでもないことが起きそうな嫌な予感がして、そういえばこういったシチュエーションの悪夢を昔はよく見たなど、ふと思った。

「都会と違って星がよく見える」

夜の空を仰いで、飯塚氏が誰にともなく言った。若いのがすぐに反応し、裕一も遅れて星空を見上げた。星を見るなんて何十年ぶりだろう。

「あの赤く輝いているのが太陽系四惑星の火星」と若者が天空を指差した。続いて、「北極星は、……北斗七星があそこだから、あれだ」

彼は指差す方向を少し変えた。

「春の大三角形知ってる？ あれが牛飼い座のαアルクトウルス、こっちが獅子座のαレグルス、ずっと下がってあれが乙女座のαスピカ」

「よく知ってるね」と飯塚氏が褒めると、「常識でしょ。中学の教科書レベルつすよ」と彼はさりりと答えた。

「ところで僕のリュックから勝手に持ち出したそのアイポッド、返してくれるかな」

この若者がいかに非常識で油断のならない奴か、そしてへタに関わりにならない方がいいということをお飯塚氏に伝えるため、裕一はわざと厭味ったらしい言葉で言ってやった。

「嫌なオッサン。そんな言い方されちゃ、まるでオレ、ドロボーみたいじゃん。あんた大人なんだから、もっと言葉に気をつけなきゃ」

謝罪の言葉も感謝の気持ちもなく、ふてくされた態度で彼はそれを裕一に返した。

三人はバスの宿に入ると、それぞれの位置にいったん戻った。裕一はリュックの中を一応点検した。一番上に乗せてあったアイポッドが抜かれた以外は、どうやら無事らしい。

「心配しなくてもいいよ。オレ盗癖なんかないから」

こちらの心の内を見透かしたような若者のセリフに、またしても裕一は背筋を凍らせた。入口の近くに陣取った若者はリュックをそのままにして、裕一を避けるように奥の飯塚氏の所に移動した。トラブルが生じないことだけを願って、裕一は横になった。

「飯塚です、よろしく」

彼は決まり文句のように、裕一に言ったのと同じ言い方で自分の名前を名乗った。

「オレ、増田肇。フリーターだけど今は失業中。お爺さん、どこから」

裕一は心の中で、アッチャーと叫んだ。

「お爺さんか。そんなに老けて見えるかい」

飯塚氏は苦笑しながら穏やかに言った。

「これでもまだ五十五歳なんだけど」

「それなら立派な爺さんじゃないっすか」

飯塚氏が空手の達人か何かで、相手に好き放題言わせておいて最後にポコポコに伸ばしてしまふところを想像して、裕一は一人ほくそ笑んでいた。

「私は横浜から」

「へえ、オレ静岡だから近いっすね。また何でお遍路なんかやってんの」

「おい君！」

堪りかねて裕一は叫んだ。増田肇は、上半身を起こして睨みつけている裕一をきよとんとした表情で見返していた。

「びっくりするじゃんかよオ。オレ今この爺さんと話してんだからさ、割り込まないでくれ

る？」

裕一は呆れながらも飯塚氏の様子を横目で窺った。相変わらず陰のある穏やかな顔つきをしている。

「別に隠すわけじゃないけど、世の中には知らない方が身のためってこともあるんだよ」
飯塚氏は諭すように若者に言った。「なにそれ」と吐き捨てるように言うと、急に興味をなくしたみたいに飯塚氏から離れると、増田肇はポシエットを腰に巻きつけて、何も言わずにバスから出て行った。自転車に乗ったところをみると近くのコンビニにでも行くのだろう。

「何ですか、あの態度？ 飯塚さんの言葉が癩に障ったんですかね」

「そうとも限らないでしょう」

「じゃあ僕が怒鳴ったから？」

「いや、そういうことではなくて、ああいうタイプなんでしよう、あの増田君は」

自分よりも年下のくせにずいぶん落ち着き払った物言いをする相手に対して、裕一は少なからず不愉快な気持ちを持ち始めていた。

「あなたの元同僚や親戚には、ああいうタイプの人間はいませんか」

裕一は思わず前の背もたれを拳で叩き、「どういう意味ですか。いませんよ、失礼な」と大声を張り上げてしまった。

「そうですか、いませんか。なら結構、というか残念というか」

奥歯に物の挟まったような彼の言い方に、裕一はもう我慢できなかった。

「何なんですか、あなたは。僕の周りにどうしてあんな変な奴がいなくちゃいけないんです」
「まあそう興奮なさらず。あなたは今、変な奴と仰いましたが、どうしてそうお思いですか」
「どうしてって、第一何を考えてるかさっぱり解らないじゃないですか。人のリュックを勝手に開けて無断で人のもの使っておいて、見つかっても謝りも礼も言わずに、いけしやあしやあとしやがって。まあ今どきの若者だからタメ口には目をつぶるとしてもです、相手の気持ちも考えずに何でもかんでもズケズケ聞いてくるというのも許せませんね」

「あなたの仰ることは一々ごもつとです。じゃあどうして彼みたいな人間がいるんですしよう」

「どうしてって言われても、そうですね、最近の親の躰がなっていないということでしょう。モンスターペアレンツなんて得体の知れない人種まで出てきますからねえ。あんな親に育てられちゃ、ロクでもない子供が出来上がるでしょう。それとも教育の貧困というやつですか。社会的なモラルやマナーも教えられない教師が増えるそうだから」

「その可能性もないとは言えませんが、私にはあの増田君はアスペルガー症候群ではないか

と思えます」

「アスペルガー？ ですか」

「ええ、まず間違いないと思います」

「時々耳にはしますけど、あれがアスペルガー？」

「だから変な奴とか人をイラつかせるとか言われるんです。あなたがさっき仰った、何を考えてるか解らないというのは、実は彼らから見た我々も同様なんですよ」

裕一は思いつき発想の転換を強いられることになった。

「と言うことは、彼らを我々と同じ人種と思つてはいけないということでしょうか」

「同じ人間だし同じ日本人だし同じ人種ではありますが、脳の働き方が我々とは違うようです。それだけです」

「それだけと言われても……。じゃあどんなに失礼なことを言われても腹を立てるなということですか」

「そうなりますね。だって彼らには悪意もなければ悪気もないのですから」

「悪気がなくても腹は立つでしょう」

「腹は立ちますが、それでどうなるものでもないでしょ。例えば認知症の人に、お前はドロボーだと言われたからといって腹を立ててもしょうがないでしょ。違います、ドロボーじゃありませんと言いつ返すのが関の山です。それと同じようなものですよ。彼らは性格が悪いわけでも躰が出来てないわけでもないんです。生まれつきの障害なんですから、責めてやるのもお門違いなんです」

さつき飯塚氏が、裕一の周りにそういう人がいないのを残念だと言った理由が少しだけ解った気がした。

「飯塚さんは、ひよつとしてそういう方面の専門の方ですか」

もしそうならもつと自分の知らないことを教えてもらえるかもしれないと期待を持って、

裕一は尋ねた。

「私？ いいえ、ただの教師です。それもこの春退職しましたので過去形ですがね」

「ああ、それで彼の扱いも手馴れていたわけだ」

「教師だったからというわけではなくて、この一年かなり勉強したんですよ、発達障害のことについてね。お恥かしいことですが、教師三十年以上やってそれまでまるで知らなかつたんです。知るのが遅すぎました。もつと若い時から知っていれば、自分にも何か出来たかもしれないし、退学させられないで済んだ生徒もたくさんいたことでしょう」

飯塚氏のお遍路の動機はどうやらこの辺りにありそうだと裕一は直感した。

「どうでしょう、彼が戻って来るまで、その発達障害というの、もう少し教えていただけないでしょうか」

裕一が自分に直接関わりのないことに興味を示すことも珍しければ、仕事以外のことで他人に教えを請うなどということも前代未聞のことだった。怖いもの見たさだったのかもしれない。

「それは構いませんが、私は専門家ではありません。本はいろいろ読みましたが、完全に自分のものになっていくかという怪しいものです。実は専門家によっても言っていることがいろいろ食い違っているし、同じ人が書いていても数年たつと意見が変わっていたりします。この分野はまだ研究が始まったばかりで、定説らしいものもないのだということをおき下さいますか」

「ではまずお聞きしますが、アスペルガー症候群のような病名のついたものは何種類もあるのでしょうか」

「軽度発達障害と呼ばれるのは、ふつうアスペルガー症候群とADHDとLD……」

「ちよつと待って下さい。いきなり頭が混乱しそうです。さっきの増田君のようなものでも軽度なんですか。かなりだと思いませんか」

「IQが七〇を超えていれば知的遅れはないとされて、軽度とか高機能とかいうのが頭に付くんですよ。社会生活に明らかに支障がある場合、軽度という言葉はかえって誤解を招くから使うべきでないという意見もあります。言葉と言えば、障害というのも良くないから使うとか、かな書きにしろとか、いろんな意見があります」

「へえー。じゃあ次に仰ったADなんかという略語の意味ですが」

「失礼しました。これも日本語の方が分かりやすいのですが、何せ長つたらしいのでADHDと言ってます。意味は注意欠陥多動性障害、わかりやすく言えば、幼児なら少しもじっとしていない、親が目を離したらすぐにどこかへ行ってしまう。学校でなら授業中に立ち歩く、先生の言うことをきかない、忘れ物が多い、片付けができない。大人でも時々いるでしょう、物忘れがひどいとか、整理整頓がまるで苦手という人」

「時々話題になるゴミ屋敷の住人ですか」

「そう、彼らはADHDと見て間違いないでしょう。あとLDというのは学習障害のことです。読むことがダメだとか、書けないとか、簡単な計算もできないとか」

「それって単に勉強ができないだけじゃないんですか。もしくは努力が足りないとか」

「そう思われがちなんですけど、そんなに単純なものではないですよ。やはり脳の働きに

問題があるようです」

飯塚氏はここでいったん話を止めた。続きを待っていてもなかなか話そうとしないので、裕一はじれったくなつて、「軽度の発達障害というのはそれで終わりですか」と先を促すと、「一応はつきりしているのはこの三種類です」と答えた。まだ何か言いたそうにしているので、裕一はまた言葉を継いだ。

「三種類とはまたシンプルなものなんですね。僕はもつとややこしく複雑なものかと思つたんですが」

「いや、本当はものすごくややこしい話なんですよ。さっきも言つたように定説もありませんしね。私は今わざと自閉症という言葉を用いずに説明したのですが……、自閉症というのはお解りですか」

「引き籠りのようなものですか」

「よくそんな風に誤解されますが、直接には関係ないと思つて下さい。やはり脳の障害によつて、普通の人とは感じ方や考え方が違っている人たちです。自閉症の人には、社会性、コミュニケーション、想像力の三つの障害があるとされています。アスペルガーもこの中に入ります」

「なるほど。社会生活を営むのに支障がありそうですね」

「ええ、だから障害なんです」

「それなら行政の福祉の管轄ですね」

「ところがこの軽度発達障害というのは何かと厄介なものでしてね。まず根本的な問題として、これを正しく診断できる医師があまりに少な過ぎるんです。障害と認定されなければ当然障害者手帳はもらえません。地域によつては、診断を受けるのに二、三年も待たされるといのが実状です」

「でも実際にそんなにいるんですか、そういう人たち」

「これも調査機関によつて数値はまちまちですが、まあ学校ならどのクラスにも二、三人はいると思つていいでしょう」

「そんなに多いんですか。一つの学校ではなく一つのクラスの中に」

「だからさつき聞いたんですよ。あなたの同僚や親戚の中にもいるんじゃないかってね。さらに厄介なことには、彼らは見た目だけでは解らないんですよ。だからいろいろ誤解も受けやすい」

「例えば？」

「やることなすこと悪意があるのではないかとか、障害なんかじゃなくて個性なのではない

かとか」

「障害と言われるより個性と言われる方がいいようにも思えますがねえ」

「それが一つの落とし穴なんですよ。国や自治体にしてみれば、障害なら何とかしてやらなければならぬが、個性なら金を出さなくて済む。つまり自己責任というわけです」

「自己責任ねえ」

裕一の嫌いな言葉だった。特にリストラされてからは、国や会社や学校などが弱い立場の者に責任を転嫁する際に使う卑怯な論法だと、この言葉を聞くとび虫唾が走った。

「行政だけじゃなくて、学校にも軽度発達障害なんて怠け者の言い訳に過ぎないと言って、絶対に認めようとしないう教師がいるんですよ。偏見でなく体育の教師に多いんです」

それはそうだろう、学校という所は強制的に努力させて、何でもやればできるんだということ教える場所なんだから。飯塚氏が言うように確かにこいつは厄介のかたまりだ。小は個人の心の中から、大は国家のレベルまで、障害か怠慢かでせめぎ合っているのだとしたら。

話の調子を少し変えて、飯塚氏が再び語り出した。

「自閉症と言えば、私が気に入ってる仮説があります。自閉症スペクトラムという考え方なんですけどね」

「何です、それは」

「一概に自閉症と言っても、その症状にはピンからキリまであります。だから色彩のグラデーションのように自閉症にも重いものから軽いものまで無数の段階があるという考え方です。この仮説を極端なまでに押し広げると、私もあなたも自閉的傾向のいくつかは必ず持ち合わせていますので、彼らと同じ土俵に乗ることができるんです」

「自閉的傾向？」

「ええ。例えば、キラキラ光るものが好きだとか、他人から見たらどうでもいいようなことに拘るとか」

「それぐらいのことだったら誰にだって多少はあるでしょう」

「ただ彼らにはそういった傾向の種類が我々よりうんと多く、しかもエネルギーの向け方も度を越して強烈なんです。そのために社会生活やコミュニケーションに支障を来すんです。自閉症の人が書いた本も何冊か出ていますが、これがけっこう面白いんですよ」

その本の書名を尋ねようとした時、表で自転車のとまる音がして、続いて増田肇が入って来た。手にはコンビニの袋をぶら下げている。

「何の話してんの、オレも入れてよ」

出て行く前の事をいっさい覚えていないかのような、屈託のない口ぶりだった。二人は目

配せするというのでもないが、思わず顔を見合わせた。彼は自分の席に胡坐をかいて座り、袋から缶ビールとイカの燻製を出すと、一人で酒盛りを始めた。

「あんたらは禁酒励行？」

飯塚氏の短期レクチャーを受けた裕一は、不思議なくらい増田肇の言動に腹が立たなくなっている自分に驚いた。それどころか、もつとどんどん喋っておかしな行動見せてくれとばかりに、好奇心丸出しになっているのが可笑しかった。

飯塚氏は「呑みたくなかった時には呑むよ、私はね」と言った。

「僕もどちらかと言うと好きな方だから。さつき出た時に買ってくれば良かったな」

口では彼向けにそう言ったが、相客がいるのに自分だけ呑めるもんか、だから買わなかったんだと裕一は考える。こういう言い方をする、よく気の付く奴ならお愛想でも、オレ自転車でひとつ走り行つて来ましようかぐらいのことは言うところだろう。お互いに言葉のキヤッチボールでコミュニケーションしているのだ。そう考えると、我々は日常ずいぶん本音を隠して無意味な言葉のやりとりで明け暮れているもんだ。時々空しくなることもあるが、その無意味な部分をさらりと捨てて真っ正直に生きているのが彼らではないのか。

増田君は美味そうにビールを喉に流し込みながら、自分を見ている二人にようやく気がついて、「呑みたいんだったら、買ってくれば」と言った。

「オレいつも睡眠薬代わりにビール呑んでんの。だからすぐ寝ちゃうよ。あした夜が明けたら起こしてね。あ、それからさっきの落語、すんげー面白かった。おやすみなさい」

一人で美味そうにツマミとビールを口にしていたと思ったら、本当にごろつと横になるなり、スヤスヤと寝息を立て出した。

「歯も磨かないで寝てしまいました。まるで子供ですね」と裕一が言うと、「そう、子供なんですよ、だから発達障害。ちなみにそうでない普通の人のことを何て言うか知ってますか」と飯塚氏はまたレクチャーの続きを始めるらしい。

「正常発達、ですか」

「とは言わなくて、定型発達と言うそうです」

「テイケイ？ まるで郵便物ですね」

「堅い話が続いたので、ちよつとくだけた話をしましょうか。桂木さんは落語がお好きなのでですね」

「いいえ、じっくり聴いたのは今回が初めてで。女房の趣味なんです。あ、落語には違いありませんが、江戸落語じゃないんです」

「その方が好都合です。江戸落語に出てくる与太郎は、演者さんにもよりますが、知能の遅

れが目立ち過ぎますので、上方の喜い公でみてみましょう」

「喜六、清八のボケ担当の方ですね」

「そうです。彼は間違いなく発達障害者でしょう。教えられたことを二歩行かないうちに忘れてしまう、比喩や例え話を通じない、ものごとを言葉通りに受け取ってしまう」

「なるほど、そう言われればそうですね」

「動物園というネタがあるでしょう」

「ええ、さつき聴いたばかりです。失業中の男が仕事を世話してもらって、移動動物園のオリの中でトラの毛皮を着るアルバイトをする話ですね」

「そうです。あの主人公の設定は、どんな仕事に就いてもすぐクビになる。あ、まずかったですね、うかつとしました」

「僕のことなら気にしないで下さい。どうぞ続けて」

「あなたは勤続何十年、この男とは全然比べ物になりません。で、この男、朝起きれない、人との応対が苦手、力仕事も責任ある仕事も嫌だと言いますよね。力仕事は別として、それ以外は発達障害者の特徴を全部備えています。落語は人を笑わせるための話ですから、多少は面白おかしくオーバーに描いています。でも、発達障害者の思考パターンと喜い公のそれはあまりに似ています。例えば、自閉症とカミングアウトしているニキ・リンコさんの本に、小学生の時、花壇の水遣り当番に当たっていたので、雨が降っている中で水遣りして笑われたというエピソードが出てきます。こんな馬鹿げた失敗をあれこれ綴ったのが落語でしょう」

「喜い公発達障害者説ですか」

「落語に限りませんよ。『男はつらいよ』の寅さんなんかどうです。まさに発達障害者の典型じゃないですか。何度も懲りずに同じ過ちを繰り返します。譬え話を通じず言葉通りに受け取って失敗する。人懐っこい愉快的キャラクターの割には、家族は大迷惑しています。これらはADHDの特徴ですが、彼は自分の事を棚に上げて人を説教します。ここはアスペ的です。私はたいていの障害者はいろいろ複雑に混じり合っているのだと思ってます。専門家は高機能広汎性発達障害と呼んでるみたいですが。これも自閉症スペクトラムの考え方で説明できそうなんですけどね」

「寅さんが発達障害だとすると、同じ監督の『おとうと』の主人公も発達障害者と言えそうですね」

「山田洋次監督は昔から発達障害の存在を知っていて作品を作っていたのでしょうか。そう言えば『学校Ⅱ』の吉岡秀隆君の演じた生徒は絶品だと思いました」

「へえ。落語や映画以外にもそういう人が出てくるのはありますか」

「小説でもお芝居でも現実世界でも掃いて捨てるぐらいいくらでもいますよ。努力してもあまり実を結ばない人間、依存症になるまで酒やギャンブルに溺れる奴、何度も痛い目に遭っているのに懲りない輩、要するに世間からダメ人間と見られるような人の多くが発達障害者とみていいんじゃないかと私は思っています」

「さつきクラスに二、三人と言われましたが、昔からそんなにたくさんいたのでしょうか」
「ここは議論の分かれるところでしてね、最近急増したのではないかとこの学者もいます。もしそうだとしたら理由はいろいろ考えられます。ただ昔は今ほど社会全体が成績主義だの効率主義だのと言わなかったのです、そういう人たちはのんびり出来たのではないかと思えます。学校や社会が画一化して、頑張れる人間以外必要としないなんてことになって来たから、大勢はじき出されて目につくようになってるんじゃないですかね。その結果、精神的に弱い人間や、適応力の低い人たちが、ウツになったり引き籠ったり、すぐにキレたり、自殺したりと、社会現象にまでなってきたのでしよう。そういう人がすべて発達障害を持っているとは言いませんが、彼らはイジメや度重なる叱責で起こる二次障害で、たやすく今言ったような症状に陥ります」

裕一は話を聞きながら暗澹とした気分になって行った。そうして、自分は六十年近くも生きていながら、世の中の何を見ていたのだろうと深く反省させられた。飯塚氏はまだしばらく喋っていたが、裕一の集中力がもはや限界とみてとったのか、「さあ、もう寝ましょう。あすはまた別々の旅路です。桂木さん、今日はありがとうございました」と言って横になった。「こちらこそ、貴重なお話をありがとうございました。おやすみなさい」と言って灯りを消した。

飯塚氏に発達障害のことについて学ばせるきっかけになったものは何だろう。そして逆打ちのお遍路に出た理由は。聞いてみたかった。でもその答も裕一には予想できた。

……世の中には知らない方が身のためということもあるんだよ……

※ ※ ※

飯塚剛毅さま

あなたとお別れしてもう十年が過ぎました。剛志も二十四、立派な大人になりました、と言いたいところですが、あなたが仰っていた通りのロクでもない人間になっております。

でもあなたが仰ったように、私が甘やかしたせいでも、あなたが必要以上に暴力を振るっ

たせいでもないことが判りました。あの子にはもともと障害があつたのです。高校の時に診てもらったら、自閉的傾向はあるが社会生活に問題はないと言われました。去年の診断では高機能広汎性発達障害の疑いということでした。どういふことか解らないのでずいぶん調べました。あなたも教育に携わる者として、ぜひ知っておいてほしいと思います。世の中には我々の尺度では測れない特別な人たちがいるのだと知れば、きっと日常の教育活動にも生かされることでしょう。

私は今でも毎日のようにあなたが剛志を叱っている夢を見ます。その声が私の頭の中から消えてくれないのです。

「俺の顔を見て話せと言ってるんだ」

「もう二度としませんというのとは一回限りの言葉だ。俺はもう百回以上聞いたぞ」

「ノートというのは落書き帳とは違うんだ。授業中いったい何をやってんだ」

「担任に個性だからなんて言われて調子に乗るんじゃない。社会で通用しないものには価値なんかないんだ」

「忘れてましたで済むんだったら、世の中無法地帯だ」

「中学にもなってそんなガラクタみたいな物ばかり集めやがって。お前は子供か」

「お前には努力しようという気がないのか。意志薄弱な奴は一番嫌いだ」

「約束を守れない奴は人間のクズだ。二度と戻って来るな」

いつも私は自分の叫び声で目が覚めます。

「仕方ないじゃないの。ぜんぶわざとやってるんじゃないんだから許してあげてよ」

剛志のような子はどうすればいいの？ どうしてあげればいいの？ 学校に行ってる間は、イジメに遭ったり友達が出来なかつたりと辛いことは多いでしょうが、親がきちんと監督していればまだ何とかかなります。でも社会に出たとたん、彼らは荒波に揉まれます。普通の人なら見様見真似で学習して行くのでしょうか、彼らは生まれつき学習能力が低いので、同じ間違いを何度でも繰り返しますし、応用もきかないのです。言葉の裏の意味や相手の表情が読めないのです、詐欺師の格好の餌食になります。剛志もカード詐欺というのに引掛かり現在数百万円もの借金を抱えています。それなのに何度もクビになって、もう働く気もしないと言つてアパートに閉じ籠もってしまいました。先年福祉課に行つて相談しましたら、働けるのに働かないというのは自己責任でしょう。それでもどうにかしてほしいというのなら、専門機関に障害認定を申請して下さいと言われました。それで高いお金を出して診断さ

れたのが、「疑いあり」です。もっと確かな所で受診しようとしたら、二年半先までびつり予約が詰まっていた。

障害が理解できない周囲の者は、私が過保護だからいけないと言って私を責めます。実家にもしよっちゅう万単位の無心に行くようで、いい加減どうにかしてくれと泣いて頼んできます。私も再婚先の九州から湯水の如く仕送りしていますが、もうそろそろ限界です。今の夫も息子を見限る気がないのなら別れるしかないと洩らし始めました。血も繋がっていない息子のために、彼が汗水流して働いて得たお金が消えて行くのですから当然でしょう。

あなたに助けてほしいなんて言いません。ただあなたの本当の息子のことを少しでも理解してやってほしいのです。

私も本当はどうしたらいいのか解りません。でも誰にも助けてもらえないのなら、産んだ私が責任取るしかないでしょう。幸いあの子は常々青木ヶ原の樹海を探索したいと言っておりましたから、私が一緒に付き合ってやろうと思います。

さようなら

安藤深雪